南阿蘇村立南阿蘇中学校　学校だより

# ハーモニー

Since2016

校訓
南 Mission 使命
阿 Action 行動
蘇 Sense 感性

R4. 10. 21(金) No.23 小柳　弘志

## 南阿蘇中学校人権集会

１０月１４日(金)に人権ボランティア委員会が計画しました。一学期の人権学習で学んだことをもとに作った各学級の人権目標を１年生→２年生→３年生と発表した後に南阿蘇中学校いじめ撲滅宣言文を全員で確認しました。生徒が練り上げた宣言文です。紹介します。

**【南阿蘇中学校いじめ撲滅宣言文】**

- **言葉に責任を持ち、相手のことを思いやれるようななかまになろう**
- **正しい情報を知り自分の考えを伝えよう**
- **本音を言い合い、その意見を尊重できるなかまになろう**
- **お互いを高め合えるようななかまになろう**

４つの宣言があります。心が浮ついたり、落ち着かなかったり、いつもと違う時に相手を自分より下にみる言動が出やすくなります。見えるところに貼って常に意識したいと思いました。最後に人権委員長さんからのメッセージの一部を紹介します。

私は、相手に伝えたいことは、直接本人に伝える力を自分自身につけたいです。私自身もネットに頼りすぎている部分がたくさんあります。この人権集会を通して差別のことや自分自身の行動などを今一度振り返っていきましょう。

## 郡市中体連駅伝競走大会

１０月１８日(火)に阿蘇市農村公園あぴか陸上競技場を会場として行われました。結果は

女子：総合順位５位 、記録　　４８分２９秒(去年総合順位３位 ・ 記録　　４７分３７秒)、
男子：総合順位４位 、記録　１時間　９分３５秒(去年総合順位６位 ・ 記録　１時間１１分５９秒)

でした。このチームでの練習期間は２週間という短い間でしたが、最後にコーチの話にもあったように男女とも予想タイムを上回った結果でした。選手の努力はもちろんですが、先生方、コーチ、家庭の協力があってこその結果と実感しました。大会後の先生の話の一部を紹介します。「長距離走は自分から進んで『挑戦します』と手をあげる人の少ない競技ですが、今年のメンバーの中には自分から進んで『挑戦したい』と意思表示をした人もいました。素晴らしいと思います。自分で体験しないと見られない『景色』があります。感動があります。今年の駅伝大会は終わりましたが、これからの学校生活、家庭生活でもいろいろなことに『挑戦』してください。」

(女子の部・男子の部　スタートの様子)

**※１０月２１日(金)学習発表会の様子は次号でお知らせします。**

## 人権について考えています

学校では人権について生徒と一緒に考えています。様々な人権についての課題がありますが、先日、全国人権擁護委員連合会から「種をまこう」という作品集が届きました。作品を紹介していきます。

# 「転校生は・・・」

始業時間ぎりぎりに教室に飛び込んできた光太は、一番後ろの自分の席の隣に、もう一つの席が置いてあるのに気づいた。(まじかよ、転校生でも来たのかなあ？可愛らしい女の子であってほしいな)と、内心ニヤケながら勝手に想像していた。その時、教室の前方の引戸が開き、担任の熊木先生が、一人の男子生徒と一緒に入って来た。先生は、光太の父親の大学時代の後輩で家もわりあい近い。時々父親に会いに来ることもあり、気さくに声もかけてくる。入って来た生徒を見て、(何だ、男か！暗そうな雰囲気の奴だな)と思った。先生は、「今日からクラスの一員となる川田保君だ、仲良くしてほしい。」「一番後ろの席が空いているから、そこを使うように。」「綿森光太君の隣だ。」(ほんとかよ、面倒くせい奴が来たものだ)と、光太は思った。「川田君、隣の光太君は、顔はこわそうだが気はいい奴だから、分からない事があったら何でも聞いたら良い。」周りから、クスクスと笑う声がする。(顔がこわそうは余分だよ。先生には言われたくないよ)と、心の中でツッコミたくなった。

隣に来る川田君を見ていると、右脚を少し引きずり加減で、カバンを左手に持っている。右手はだらりとしており、動きが悪そうだ。川田君は目が合うと、こっちを向いて少しギコチない会釈を返していた。「では授業を始める。教科書の五十八ページを開けて。」川田君は左手ばかりを使っている。それもあまり慣れていないように見える。ノートを出して文字を書くのも左手だ。字も大きくて、ギザギザっぽく、読みにくい。光太は、何となく気になり隣を見続けていた。すると、川田君が書いている言葉がはっきり見えた。(まじかよ、事故死、車、道路、両親？・・何だ、あの言葉。何を書いているのだ？キッタネエ字で。やっぱり面倒くせい奴が隣に来たもんだ。先生に俺がハメラレタ気がしてきた)

翌日の朝、またもや先生の後ろから一人の男性が教室に入って来た。えっ！(川田君に似た人だ)「今日はこの方の話をみんなに聞いてほしい」と先生が言った。川田公造と名乗ったその人は叔父さんにあたるらしい。話はこうだった。「保と両親は同じ車に乗っていて、対向車が中央ラインを越えてきて、正面衝突する事故に遭い、両親と相手の運転手は亡くなり、保も半身が不自由になってしまいました。今月から兄夫婦に代わって私どもが保と一緒に生活するようになりました。まだまだ保のリハビリは進んでいません。何かとクラスの皆さんには面倒をかけると思いますが、仲良くしてやってください。」と深々と頭を下げられた。

クラスの者は皆、ぼうぜんとしていた。中には涙を流している人もいた。(どおりで川田君は暗く沈んでいるわけだ。人生には考えられないようなことが身近に起こるものなんだなあ、あのノートで、左手で字を書く練習をしていたのか)と気づいた。ちらっと隣を見ると、恥ずかしげにして下を向いている川田君の姿が見えた。

休み時間に光太は「そんなことがあったのか、大変だったんだなあ。」と思わず語りかけていた。川田君はボソボソと話してくれた。「一時は何も考えられずに病院のベッドにいたし、何週間もたってから、涙が止まらず相手のことを恨んだりしたよ・・・」「でもね、公造叔父さんがいてくれたので僕は路頭に迷うことがなかったんだ。」と、また、こんなことも話してくれた。「叔父から教えてもらったことだけど、『漢字や仮名は右手で書く歴史があり、それが当たり前だった。だから左手で文字を書くことは難しいけど、練習すれば数年後には右、左どちらの手でも書けるようになるよ』と言われたよ。」また、川田君は「左手で文字を書かなければならない人はたくさんいるんだから僕も頑張ろうと思っているよ。」(まじかよ！彼は大変なショックから、立ち上がろうとしているのだ。心の強い、すごい奴だったんだ。面倒くせい暗い奴なんて思った自分が恥ずかしい)光太は川田君の顔を見て言った。「保君、隣のよしみで、右手が必要なときは遠慮なく言ってくれよ、僕の右手を貸すからさ。」川田君は笑顔になって左手を出してきた。(そうだよな。右手が今は使えない保君の友情の証だな)光太も左手を出した。「応援するからな。」ガッチリ握手をした。周りのみんなも「そうだよな。」という顔で微笑んでいる。